

日本軍と阿片



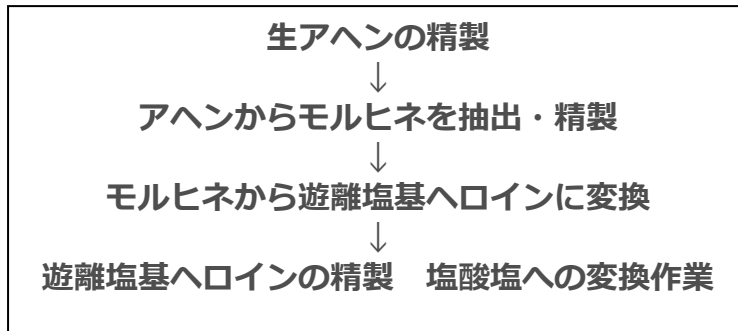
2018 年 4 月 30 日

佐川道夫

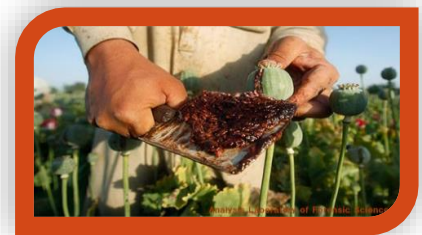
目次

目次	1
阿片・モルヒネ・ヘロイン	2
阿片の歴史	3
二反長音蔵	5
国際条約への流れ	7
星製薬と後藤新平	8
岸信介の戦争犯罪	9
調査報告 日本軍と阿片	11

阿片・モルヒネ・ヘロイン



生アヘン：ケシ（*Papaver somniferum* L.）の花が散ってから約 10 日後、縦に浅く切傷をつけ、にじみ出てきた乳液が固まると、これをへらでかき取って集め、弱く加熱乾燥させたものがアヘンである。塊状としたものが生アヘン。生アヘンを粉末とし、モルヒネの含有量を 9.5～10.5% に調整したものが日本薬局方のアヘン末である。吸煙用のアヘンは、生アヘンを水に溶かして不溶分を除去し、蒸発濃縮してエキス状としたもので、特別のきせるを用いて小さなランプの火で発煙させ吸煙する。



アヘン：アヘン（opium）中のアルカロイドを抽出し精製した塩酸塩
主成分はアヘンアルカロイドでモルヒネ、コデイン、テバイン、パパベリン、ノスカピン（旧称ナルコチン）、ナルセインなどである。
アヘンは中枢神経を麻痺(まひ)させ、鎮静、鎮痙(ちんけい)、鎮痛、鎮咳(ちんがい)、止瀉(ししゃ)（下痢止め）、催眠および麻酔補助の目的で使用される。効果はモルヒネと同様であるが、作用は緩やかで遅い。副作用として悪心、嘔吐(おうと)、頭痛、めまい、便秘、皮膚病、排尿障害、呼吸抑制、昏睡(こんすい)など慢性中毒をおこし、廃人同様になる。

モルヒネ：アヘン中のモルヒネ抽出し精製した塩酸塩

1804 年ドイツの薬剤師フリードリヒ・ゼルチュルナーが初めて分離。この薬が「夢のように痛みを取り除いてくれる」ということから、ギリシア神話の夢の神モルペウス（Morpheus）にちなんでモルフィウム（morphium）と名づけた。

1853 年の皮下注射針の開発で普及した。鎮痛やアヘン・アルコールの中毒（依存症）の治療として用いられた。南北戦争ではモルヒネは広く使用され、軍人病

(モルヒネ依存症) による 40 万人を超える被害者を生み出した。また普仏戦争において、同様のことが西欧で起こった。

ヘロイン : 1874 年に、ヘロインがモルヒネを原料に生成された。

阿片の歴史

原産 : ケシは地中海沿岸地方。紀元前 1500 年代の『エーベルス・パピルス』に、鳴く幼児にケシのシロップを与えると書かれている。
ギリシアでは紀元前後から麻酔剤として使用された。

1 世紀～12 世紀 : 小アジアの産物であったが、喫飲用としてブドウ汁、甘草などの浸出液と調合して嗜好(しこう)品としてつくりあげられた。

アヘンはアラビア人によりペルシア、インド、さらに中国に広められた。ケシが初めて移植されたのは唐代であり、花が美しいので観賞用に栽培され、その種子は御米(ぎょべい)とよばれ、粥(かゆ)にして食用に供された。ケシの乾燥果皮(罌粟殻(けしがら)・粟穀(ぞくこく))は北宋(ほくそう)時代の 11 世紀から薬用に供された。元代の朱震亨(しゅしんこう)の『本草衍義補遺(ほんぞうえんぎほい)』では下痢止め咳止め薬。

15 世紀 : 明(みん)代の『医林類証集要』(1482)にみえる記事が中国ではもっとも古いアヘンの製造を伝えていて、そこに阿芙蓉(あふよう)という名で瀉痢止めの処方が記されている。

16 世紀 : 李時珍(りじちん)は『本草綱目』(1578 年脱稿、1596 年刊行)のなかで、阿芙蓉は彼の時代より少し前に天方国(アラビア)から中国に紹介されたと書き、その製法、薬効を記述し、同時に房中術に用いられた事実を指摘している。

17 世紀 : 清代に吸煙の風習が始まった。

1729 年にたばこにアヘンを混ぜて飲むことを禁じた、最初の吸煙禁止令が福建の巡撫(じゅんぶ)、劉世明(りゅうせいめい)によって発せられた。

1756 年 : 『本草綱目拾遺』で趙学敏は、アヘン吸煙(鴉片烟)の風習が蔓延している。アヘンは 1～2 回これを吸うとやめられなくなり、その結果、肉体的、道徳的な退廃がおこり、「破家喪身」(家を破産させ身体を破滅させる)に至る者が出ると述べ、その吸飲の風習は最初に台湾でみられたとしている。当時、アヘンはルソンなどでつくられて中国へ持ち込まれたとされ、年間 200 箱(約 60kg/箱)。

1757 年 : イギリス東インド会社がインドのアヘン専売権を握ると、中国への輸入は急増。

1780 年 : 1,000 箱に達する。

1816 年 : 5,000 箱を超える。

1820 年代 : 16,877 箱に増加。

1840~1842 : アヘン戦争。南京条約の締結でアヘン戦争終了後インドからのアヘンはそれまで以上に流入。

1850 年 : 56,839 箱。

1880 年 : 96,839 箱に増大した。

1906 年 : 清朝政府は 10 年計画でケシの栽培を禁止、アヘン吸煙を取締まり。

1909 年 : 上海と広東(カントン)だけをインド・アヘンのために開放するという国際協定を結んで、アヘン輸入を中止しようと努力した。

日本 : 江戸時代の初めにもたらされた『本草綱目』によって、阿芙蓉という名でその薬用が伝えられた。1708 年の如見(にしかわじょけん)の『増訂華夷通商考(ぞうていかいつうしょうこう)』や 1713 年の寺島良安の『和漢三才図会』にはアヘンの輸入や薬用の記事がみえるが、江戸時代末期まではアヘンを吸煙した事実は文献などには現れない。

明治政府は 1870 年(明治 3)に阿片煙禁止の布告を発し、1875 年に薬用アヘンの取締法をつくった。

二反長音蔵

二反長 音蔵（にたんちょう おとぞう、旧姓：川端）、1875 年（明治 8 年）7 月 1 日 大阪府三島郡福井村（現在の茨木市）生まれ- 1951 年（昭和 26 年）8 月 7 日没。農民・農業技術者で阿片の材料となるケシの日本国内栽培に尽力した。「日本の阿片王」と称された。



アヘン材料となるケシの栽培に興味を示し、後藤新平のバックアップを得る

ことに成功、福井村でケシ栽培をはじめた。以後ケシの栽培技術と品種の改良に努め、モルヒネ含有量が従来品種（8%程度）の数倍多い三島種（平均 17.5% 1914 年）を開発した。

昭和戦前期に日本は満州・朝鮮・内蒙古などの植民地・占領地でケシを栽培してアヘンを製造し、これが軍部の収入源となっていた。音蔵は日本国内はもとよりこれらの地域に赴いて、ケシ栽培の技術指導に努めるとともに阿片販売にも携わった。著作に「ケシ栽培及阿片製造法」がある。



わしの作っている阿片は すべて薬用としてや
わしは毒になる阿片は作ってへん
瀕死の重病者の生命をよみがえらせる阿片 モヒ
わしはそれを作っているのや

その阿片を このように悪用し利潤を得る者がいることが事実とすれば
それは民間人であろうと 官吏であろうと わしの敵や

二反長音蔵に関する本としては；

『戦争と日本阿片史 ～阿片王 二反長音蔵の生涯』 息子の小説家・児童文学作家である二反長半（にたんおさなかば）（1907 - 1977）が書き記した。

NHKで『調査報告 日本軍と阿片』（2008 年 8 月 27 日放送） タイトルはこれを借用。

「日本の阿片戦略」 倉橋正直著

「甘粕正彦」角田房子著 満州の国策である阿片ビジネスでリーダーシップ

「戦争と日本阿片史～阿片王二反長音蔵の生涯」のなかで二反長半は、

清国から領有した台湾に阿片中毒患者は充満していた。日本政府はこの実態につき当たって、大風呂敷とのあだ名をとっている後藤新平と一農民であった私の父二反長音蔵、そして「薬は星」の星一（作家 星新一の父）とが手を組み、阿片漸減策としての阿片専売制度の施行であった。

その後日本は、第一次世界大戦で勝ち組となる。中華事変から太平洋戦争一、農民二反長音蔵は、阿片を採取する原植物ケシの栽培と生阿片製造の役割まで受けもち、いつの間にか阿片狂から阿片王と言われるまでになり、満州蒙古まで、その栽培製造の指導奨励に出かけて行った。

だが、バカの一つ覚えか。これがお国のためと思って作っていた薬用阿片を、裏で誰がどのように動かしていたのだろうか。中国大陆での戦勝には、阿片と弾丸が決定打といわれていた時代だ。アメリカだって、イギリスだって、フランス、ソビエトまでが日本への鋭い非難を繰り返しつつ、自らも大量の阿片を動かしていた。

日本の大陸浪人、密売買業者、中国名の日本人を頭領とする緑林の馬賊、また阿片將軍と称せられる中国人軍閥の活躍、それらをあやつった日本軍、関東軍の力、一列強に負けじとする日本の阿片史は、そのまま極東の近代史の大きな裏面史となる。

それらを私は戦後三十年たった、今となっては歴史だからと、十数年あたためてきた構想のもとに、門外不出、極秘の文書を使って二年を費やし書きあげたのが本書である。

阿片はしょせん麻薬でしかないのだろうかー。

音二郎（後の音蔵）がケシの栽培を思いついたのは、新聞で台湾島民の吸飲阿片を輸入する金額の莫大さに驚いたからで、そのために国費の海外流出が国の経済にまで影響すると書いてあったことによる。

五里南の大阪には、道修町という薬品商のみが軒を並べている町があって、そこでは許可を受けてケシの種を売っていた。音二郎はそこから薬品として売られている種子を買いこんできて播種したのだ。

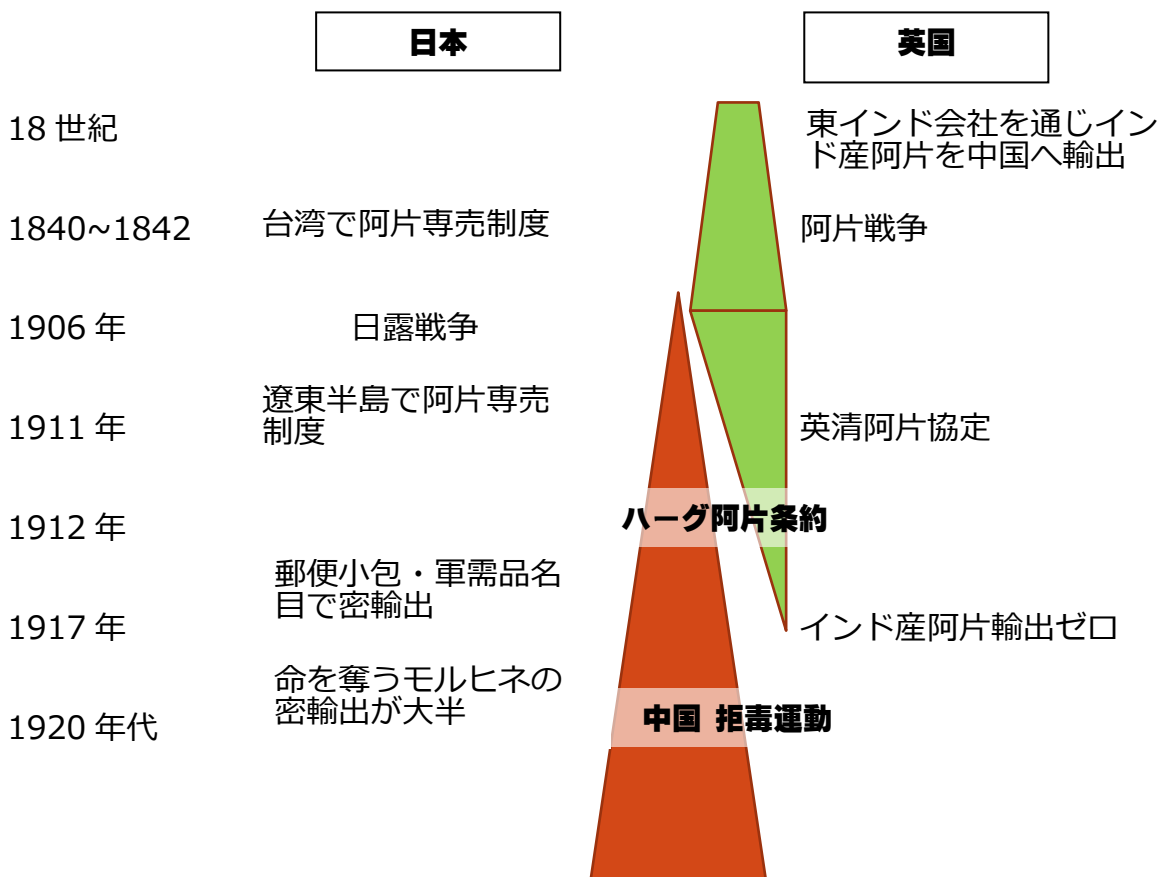
青年農民音二郎は、紋付羽織の村長たちが、ただ平頭している後藤衛生局長に、自分のケシ栽培阿片製造の決意が、あくまで日本国家を思っていることであり、放置すれば死を迎えるばかりの、台湾でいう阿片癮者すなわち中毒患者救済という人道的立場からであることを強調した。

と書いている。

また、「日本の阿片戦略」で倉橋正直は遺族の家を訪ね 「二反長音蔵の養子先は2反農家で貧農であったが、ケシ栽培の技術開発と栽培技術教授に力を注ぐ篤農家で、国家の財政を助けるためだけで、自分個人の利益は考えなかった。」と書いている。

国際条約への流れ

1906 年	清朝 禁煙章程公布（10 年で禁煙） ケシ栽培面積を毎年 1 割削減 イギリスとインド産阿片の輸入漸減交渉
1911 年 5 月	英清阿片協定 1917 年までにインド産阿片の輸出停止
1911 年 10 月	辛亥革命 袁世凱 清朝の阿片政策維持
1911 年 12 月	第 1 回国際阿片会議（ハーグ） 米国主導
1912 年	ハーグ阿片条約 未批准
1914 年	第 1 次世界大戦勃発
1916 年	袁世凱死去。軍閥混戦時代。 各軍閥軍費確保の為、阿片生産。
1917 年	英 インド産阿片輸出停止。
1919 年	ヴェルサイユ講和会議。 講和条約調印批准がハーグ阿片条約も批准とみなされた。 米国主導
1925 年	ジュネーブ第 1・第 2 阿片条約 芸国主導
1931 年	「麻薬の製造の制限および分配取締に関する条約」 米国主導



日本が国際条約違反を問われる訳は、国際阿片条約後も、密輸出していた日本がアメリカの標的に。 この辺りの話が、ノーベル賞作家石黒一雄の小説「わたしたちが孤児だったころ」に書いている。

星製薬と後藤新平

1916年 解熱・消化剤のキニーネ製造したい星製薬、後藤新平と組んでジャワ産キナの輸入しキニーネ製造販売し大儲け。

1915年 日本で初めてモルヒネの製造に成功
台湾専売局より東京衛生試験所を払下げ受けモルヒネの独占製造権をうる。

1917年 内務省は阿片令改正し 星製薬・大日本製薬・三共製薬にモルヒネ製造を認可。
モルヒネ精製技術を官報で公開。

コカインの精製に成功

1921年 東洋一の製薬会社

1924年 後藤新平の政敵加藤孝明内閣が発足。 後藤新平の資金源の星製薬を徹底的に冷遇。 台湾総督府のスタッフ入替、阿片供給を停止。

1932年 星製薬 破産。

1934年 台湾星製薬設立。 台湾産キナを使ってキニーネ生産

1951年 星一 死亡。 星新一が新社長。

「人民は弱し、官吏は強し」と星新一は「阿片事件」で書いている。

契機となってその後、生阿片払い下げは三社に増えた。しかも二十一代第一次加藤高明内閣が大正十三年(1924)六月誕生すると同時に、星製薬への払下げは中止されてしまった。

後藤新平：1857年6月4日～1929年4月13日 仙台藩水沢城下生、医学博士
1898年児玉台湾総督の下で民生局長となる。



阿片吸引漸減策をとるが、専売権で阿片利権・裏社会との繋がる。
星製薬の関係で台湾阿片事件。

1906年 満鉄総裁

1923年 (関東大震災後) 帝都復興院総裁として震災復興計画策定
現在の東京幹線道路網はこの計画に沿っている。

1924年 東京放送局 初代総裁

1928年 ソ連でスターリンと会談



岸信介の戦争犯罪

1896年11月13日～1987年8月7日 山口市生
東大時代の 国粹主義を主張する上杉慎吉、大アジア
主義の大川周明、国家社会主義の北一輝の影響を受
ける。

1936年 満州国国務院実業部総務司長就任。計画経
済・統制経済を取り入れた「産業5か年計画」を実
施。 東条英機・鮎川義介（日産コンツェルン）・
里見甫（阿片王、甘粕正彦と謀報・宣伝・宣撫、里見機関）等広範な人脈を築く。政治
資金を調達するようになる。「政治資金は濾過機を通ったきれいなものを受け取らなけれ
ばいけない。問題が起こったときは、その濾過機が事件となるのであって、受け取った
政治家はきれいな水を飲んでいるのだから関わり合いにならない。政治資金で汚職問題
を起こすのは濾過が不十分だからです」 と言っている。 阿片専売による莫大なアヘ
ンマネーを岸らは、国家経営や戦争遂行、謀略工作に回す一方、一部を私的に利用して
いた。 「巨額の金を動かして人脈と権力を培
養し、人脈と権力を動かしてカネを集めるとい
う手法は紛れもなく岸のものだったのである」

1941年 東条内閣の商工大臣として入閣

「米英に対する宣戦の詔勅」に署名。

東条を資金面で援助。

「濾過器発言（政治資金は濾過機を通ったきれ
いなものを受け取らなければいけない。問題が
起こったときは、その濾過機が事件となるのであって、受け取った政治家はきれいな水
を飲んでいるのだから関わり合いにならない。政治資金で汚職問題を起こすのは濾過が
不十分だからです）」。

1944年7月9日 サイパン島陥落。東条内閣倒閣工作に加担。

1945年9月15日 A級戦犯容疑で逮捕

1948年12月24日 不起訴のまま無罪放免

米国に阿片情報を提供する見返りに戦犯訴追を免れた。

その後の岸の活躍(?)は「週刊朝日」2013年5月24日号のリポート「(星条旗)
の下の宰相たち」シリーズによると

〈戦後の米国のアジア政策は、米国の国益を守ってくれそうな、その国における「ストロン
グマン」を探し出すことから始まる。韓国における李承晩、台湾における蒋介石がその
典型だ。日本においては吉田茂であり、鳩山一郎、緒方竹虎と続いて、1950年代半ば
に岸の番が巡ってきた〉

では、岸に与えられたミッションは何だったのか。

〈(日本国憲法)第9条があるために日本は自衛目的以外の軍隊が持てず、米国との相互
的な防衛能力を保有できなかった。つまり、米国が攻撃を受けても日本は援軍を出すこ
とができない。さらに言えば、米国の軍事戦略に乗っかる軍隊を持つことができない。



この相互防衛の考え方が、集団的自衛権の解釈として、1951年の旧日米安保条約締結以来、日米間の問題となった〉

まさにいまの安倍政権が強引に進める新安保法制につながる話だ。この問題解決こそ、岸がアメリカから言われた最大のミッションで、そのために最初に着手したのが〈「建設的勢力」の結集〉つまり保守合同だ。では、カネはどうしたのか。〈——岸元首相に対して CIA から資金提供があったという話をどう思いますか？

「そういう証拠はあると思う。賄賂的な意味合いよりは、派閥の運動資金や政治キャンペーン資金というような形で提供されたと理解している」

——資金はどのような形で渡されたのでしょうか？

「当時、CIA から経済団体や企業を通じて岸のほうに資金が流れたという記述を米国側の書類で私は目にしたことがある」〉（前同「週刊朝日」より）

これについては、CIA から自民党への秘密献金をスクープしたニューヨークタイムズのティム・ワイナー記者も、その著書『CIA 秘録』（日本版は文藝春秋）でこう断言している。

〈CIA は 1948 年以降、外国の政治家を金で買収し続けていた。しかし世界の有力国で、将来の指導者を CIA が選んだ最初の国は日本だった〉

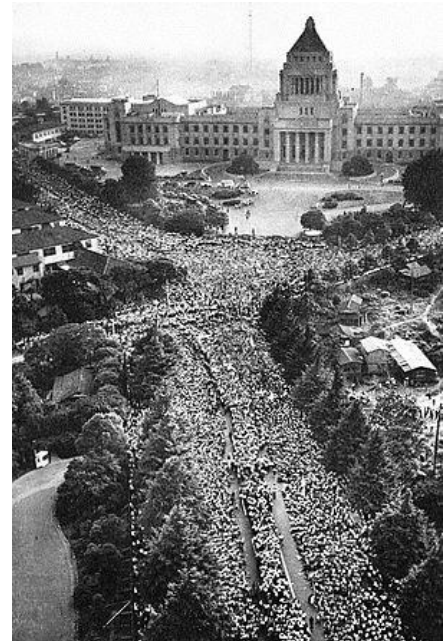
〈釈放後岸は、CIA の援助とともに、支配政党のトップに座り、日本の首相の座までのぼりつめるのである〉

岸は、日本におけるアメリカの国益を実現するため、アメリカによって選ばれ、アメリカの資金でつくられた首相だったということだ。A 級戦犯容疑者の身からわずか 9 年、公職追放解除からたった 5 年足らずで政界トップに上り詰めた秘密がここにある。

その岸が首相在任中にアメリカに言われてやった最大の仕事は、言うまでもなく日米安保条約の改定だ。一般に、旧安保条約では日本がアメリカに基地を提供する一方でアメリカの日本防衛義務が明記されていないとの批判があったが、新条約ではそれを盛り込ませることができたと評価されている。だが、アメリカの狙いはそこではなかった。佐藤記者はこう書いている。

〈新条約は 5 条で米国の日本防衛義務を盛り込んだが、続く 6 条で、米国のアジア戦略のために在日米軍を利用できる「極東条項」が組み込まれた。米国の本音を明確にした条項だ〉

しかもこの「極東条項」の「極東」の範囲が明確でなく、アメリカは日本の基地を好き勝手に使えるようになった。事実、新安保条約締結から 50 年以上経つが、米軍が日本防衛のために出動したことは唯の一度もない。反対に、米軍がアメリカの戦争のために日本の基地を自由に使うことは日常化している。安保条約改定が誰の指示によるものだったかがわかるだろう。



佐藤記者はこうした事実をさらに裏付けるため米ワシントン郊外にある米国国立公文書館別館を訪ねる。そこで CIA が作成した「岸信介」のファイルの閲覧を請求し、驚くべき事実と遭遇する。なんと、CIA のファイルにはたった 5 枚の資料しか入っていなかったのだ。

Q: 安倍首相はなぜ、集団的自衛権行使にあそこまでこだわるのか？

A: おじいちゃんが不起訴の見返りにアメリカと約束したことだから。

Q: 安倍首相はなぜ、日本国憲法を「みっともない」と毛嫌いするのか？

A: おじいちゃんを助けてくれた G2 と敵対する人たちがつくった憲法だから。

Q: 安倍首相はなぜ、改憲しようとしているのか？

A: それも、おじいちゃんが不起訴の見返りにアメリカと約束したことだから。

Q: 安倍首相はなぜ、沖縄の「屈辱の日」をお祝いしようとするのか？

A: おじいちゃんの公職追放がやっと解除された記念の日だから。

Q: 安倍首相はなぜ、「侵略」や「おわび」や「反省」をためらうのか？

A: あの戦争はおじいちゃんも深く関わった自存自衛の聖戦だから。

そう。新安保法制も改憲も、すべては、おじいちゃん、岸信介とつながっているのだ。そういえば、安倍首相はそのアメリカ観も、岸信介に強い影響を受けている。安倍首相の中には「良いアメリカ」と「悪いアメリカ」、2つのアメリカがある。「良いアメリカ」は、おじいちゃんを救ってくれた。戦前の日本の旧指導者にも寛容だったアメリカ。一方、「悪いアメリカ」は日本に憲法 9 条や主権在民、人権尊重などを押し付け、戦前の日本の旧指導者を“悪”と決めつけたアメリカ。

だから、安倍首相は「『悪いアメリカ』が押し付けた戦後レジームからの脱却」を主張しながら、「『良いアメリカ』の戦争に自衛隊を捧げる」安保法制を強行することに矛盾を感じない。

いずれにしても、たった一人の政治家のグロテスクな“おじいちゃんコンプレックス”によって、日本は今、国のかたちを大きく変え、アメリカの戦争に引きずり込まれようとしているのだ。我々はそのことの異常性と恐ろしさを本気で認識すべきだろう。

調査報告 日本軍と阿片 (NHK 2008 年 8 月 17 日放送)



昭和12年（1937年）に勃発した日中戦争一。広大な中国で、日本は最大100万もの兵力を投入し、8年に渡って戦争を続けた。武力による戦闘のみならず、物資の争奪戦、ひいては金融・通貨面でも激しい闘いを繰り広げた。

「戦争はどのようにして賄われたのか」。最新の研究や資料の発掘によって、これまで全貌が明らかにされてこなかった中国戦線の「戦争経済」の様々な側面が浮かび上がっている。その一つとして注目されているのが、当時、金と同様の価値があるとされた阿片（アヘン）である。

19世紀以降、イギリスなど欧州列強は、中国やアジアの国々に阿片を蔓延させ、植民地経営を阿片によって行った。アヘンの国際的規制が強化される中、阿片に“遅れて”乗りだしていった日本。日本の戦争と阿片の関わりは、世界から孤立する大きな要因になっていたことが、国際連盟やアメリカ財務省などの資料によって明らかになってきた。

また、これまで決定的なものに欠けるとされてきた、陸軍関係の資料も次々に見つかっている。軍中央の下で、大量のアヘンを兵器購入に使っていた事実。関東軍の暴走を阿片が支えていた実態。元軍人たちの証言からも、日本軍が阿片と深く関わっていた知られざる実態が明らかになってきた。

番組では、日本と中国の戦争を、経済的側面からひもとき、知られざる戦争の実相に迫る。この文章を自分の文章に置き換えます。右側の画像を自分で用意した画像に置き換えることもできます。